跡見学園女子大学国文学科報　第十五号（昭和六十二年三月十八日）

『敵討蚤取眼』翻刻・略注

昭和五十八年度卒業　岩田ゼミ
秋月　康枝・内田美佐子・小倉佳代子
大沢由美子・長瀬　雅子・荒谷久美子
伊藤美佐子・奥野由理枝・陸田　英子
佐藤さとみ・中田　泉・森　佐恵子
吉崎久美子・吉田みさ江
岩田　秀行

解　題

本書は、寛政十三年（二月に享和元年と改元）刊の、曲亭馬琴の黄表紙作品である。序文中に示される如くに、前年の寛政十二年に刊行された『花見話虱盛衰記』の好評を受けて、その後篇として趣向されたもので、蚤に関する発句を発端より第十五回まで、十六回にわけて掲げ、その発句の句意に関連させながら、人間と蚤の取ったり刺したりする関係を敵討になぞらえ、話を展開して行く。敵討ということから、『仮名手本忠臣蔵』に関連させた行文が多く、第十三回も、絵組から考えて、十段目の天河屋義平をかすった趣向かとも考えられる。

また、毎回冒頭に掲げられた発句十七句のうち、十三句は、宝永二年刊、百里編の『銭龍賦』から採られたものである。馬琴がこの『銭龍賦』を参照したであろうことは、『著作堂俳書目録』（服部仁氏『馬琴所蔵本目録㈠』――『同朋大学論叢』40・昭54・6による）に、

同（＝俳諧）銭龍賦　一冊

とあり、また『曲亭蔵書目録』（服部氏前掲論考による）に、

銭龍賦　写本　一冊

とあることからも明らかであろう。なお、序文にいう「古人撰集」が、この『銭龍賦』であることに気づいたのは、内田美佐子・小倉佳代子・大沢由美子のグループである。近世文学に始めて触れた学生が、自らの力でこの解明に至ったことを一言付記しておきたい。

（この項、文責岩田）

影印書誌

本文　国立国会図書館蔵本（二〇七―五〇八）。三巻・三冊・十五丁。

題簽　上巻――早稲田大学図書館蔵本（へ一三―二九四六―一三三）。

中・下巻――東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（三七―一四）。

柱刻　「敵討　一～十五」。

作者　「曲亭馬琴作」（十五丁ウ）。

画者　未署名。『戯作外題鑑』に「重政画」。

板元　仙鶴堂鶴屋喜右衛門。「通油町鶴喜 仙 窪」（絵題簽）。

刊年　寛政十三年。「寛政辛酉」（一オ）。

絵題簽・上巻（早稲田大学図書館蔵）

印記　鶯亭金升蔵書・鶯亭金升・定・帝国図書館蔵・図購求・明治三一・六・三。

翻刻・略注　凡例

一　翻刻底本は国立国会図書館蔵本を用い、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本・同特別買上文庫諸家蔵本（稗―九六）・早稲田大学図書館蔵本を参考にした。

一　翻刻はできるかぎり原文のままとし、漢字を当てたり句読点を補ったりしなかった。

一　変体仮名および漢字の異体・略体等は現行の字体に改めた。

一　注はなるべく解釈にわたることを避け、読解の参考になると思われる文献を掲げるにとどめた。

一　絵題簽は、本来の位置にもどさず、一括して冒頭に掲げた。

（絵題簽）

（*1）富貴多因筆墨致
古今誰謂簡編疎

馬琴編
敵討蚤取眼（かたきうちのみとりまなこ）　上　中　下
通油町鶴喜
仙窪

絵題簽・中巻（東京都立中央図書館蔵）

絵題簽・下巻（東京都立中央図書館蔵）

＊1　「冨貴多因ニ筆墨一致
古今誰謂ニ簡編疎一」
（『円機活法 詩学』巻十一・文学門・経籍・聯句）

本絵題簽は、寛政十三年（＝享和元年）の「鶴屋(乙)」（浜田義一郎氏「黄表紙題簽一覧」――日本古典文学全集46『黄表紙・川柳・狂歌』）にあたるものである。

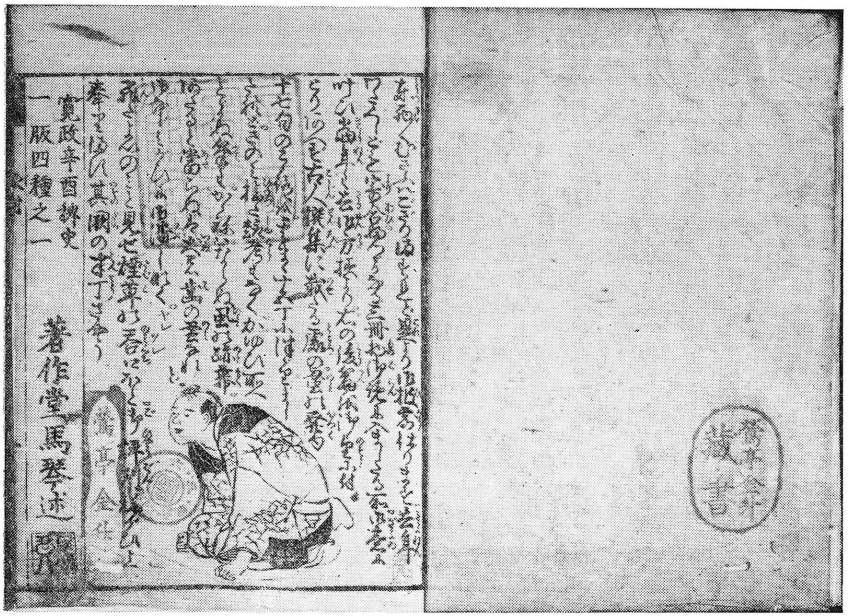
注に記したように、聯の対句は『円機活法』所収のもので、『曲亭蔵書目録』に、

円機活法　合巻　廿冊

とあり、後述序文の「一版四種之一」との関連から、あるいはこの絵題簽の意匠に馬琴も関与したものであろうか。

（一オ）

東西〳〵むさふはござりますれど、是より御披露仕ります、去年わたくしども寄合、ふつゞかなる三冊物(＊1)御覧に入ましたる所、御意に叶ひ、當年も去御方様より、右の後篇を御望に付、とりあへず古人(＊2)撰集に載たる處の、蚤の発句十七句のこゝろを、其まゝ十五丁につゞりましたれど、さのみ捻た趣考もなく、かゆひ所へとゞかぬ筆も、かゝねはならぬ虱の(＊4)跡幕、あたると當らぬは犬の歯の蚤なれど、御なじみがひに御潰しなく、ヤレソレ飛だよいのみと、見せ煙草の呑口ほと、御評判ねがひ上奉ります、其(＊7)闕の半丁さやう



一オ

（以下 国立国会図書館蔵）

（＊8）寛政辛酉稗史
（＊9）一版四種之一　著作堂馬琴述

馬琴

＊1　寛政十二年刊『花見話虱盛衰記』。清田啓子氏「翻刻曲亭馬琴の黄表紙(八)」(『駒沢短期大学研究紀要』12・昭59・3)に影印翻刻。

＊2　宝永二年刊『銭龍賦』。

＊3　「しらみ」の誤りカ。

＊4　江戸歌舞伎において興業開始後、前の幕を適宜抜きながら、追加上演して行く続きの幕。

＊5　「犬の歯に蚤　〔カナ、ホシ〕犬の蚤で噛あてた○猫の歯にのみとも云」(『俚言集覧』)。

＊6　「御らん遊しましたる御かた様猶又御ひゐきのかた様へひやうばんよろしくねがひたてまつり升そのため口上さよふに」(『役者夏の富士』七オ)。

＊7　「闕　囲碁所ヽ言。出漁隠叢話」(『書言字考節用集』言辞)。

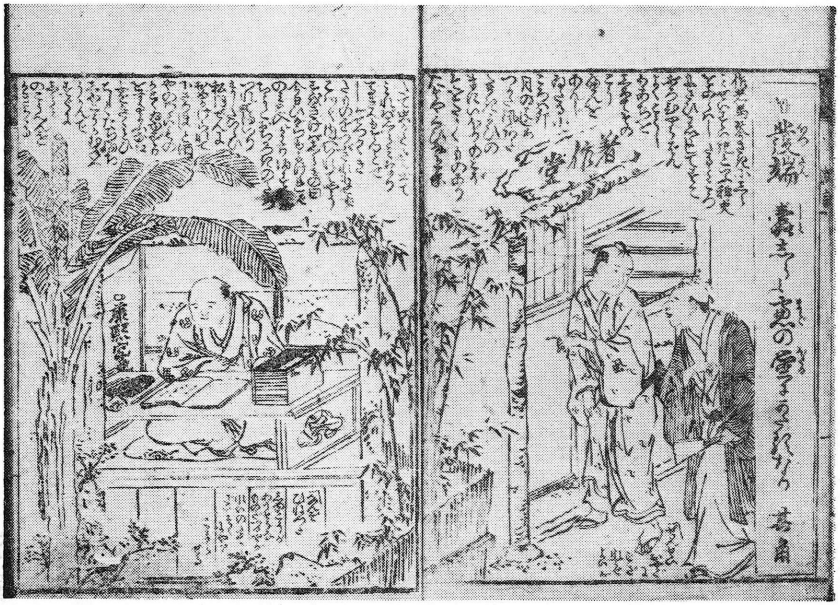
＊8　寛政十三年。

＊9　馬琴作『足手書草岳画賦』・『敵討蚤取眼』・『教訓跡之祭戯単』、東紫作『雲飛脚二代羽衣』の四作品が、この年鶴屋より同一絵題簽で刊行されている。なお、『大野屋惣兵衛蔵書目録』第四冊（柴田光彦氏『大惣蔵書目録と研

究』による）に、半紙形草双紙として、

教訓蹟の祭　敵討のみ取眼　羽衣　足手

の書名が見え、後刷の可能性もあるが、この四作品が一本にまとめられていることを知る。



一ウ　　二オ

（一ウ・二オ）

發端　蠹しらみ窻の螢にかたるなり　其角

作者馬琴さきにしらみ(*2)せいすい記といふ稗史をあらはしたるところにさひわいにしてすこぶろひやうばんよくことしもあぢをしめてそのこうへんをあんじゐたるにころは(*3)卯月のはじめつかた風あたたかきよひのまにいほりのとぼそをたゝくものありたそやくひなか茶たて虫かとたち出てみればしらみなり(*5)馬きんもぞつとせしがせつかくきたものをつぶされもせずこは〳〵内へいれてやうすをきけばしらみの曰今日ひがらもよければのみと(*6)入レかわりますればちよとおちかつきのためつれてまいりましたいらひ私同ぜんにおめかけられて下さりましと酒やのわかいものかとくゐゆずりをするよふな口上をきくとひとしくたちまちしゆこうかむねへうかんですぐにしらみのこうへんをかきかゝる

「せんせいおやどにござればよいが

「なんぞひねつたしゆこうがありそうなものだつるやがれいのたてざいそくにやヶこまらせる

＊1　「臺しらみ窓の螢にかたるなり　其角」（『銭龍賦』銭龍）。

＊2　寛政十二年刊『花見話虱盛衰記』。

＊3　「頃は正月の末つ方、春めきながら冴えかへり」（謡曲「兼平」）。「面白や頃は五月の初つかた、四方の梢も深みどり」（謡曲「飛鳥川」）。「有難や頃は卯月の始とて、賀茂の御生の時すでに」（謡曲「代主」）。「ころはやよひのはしめつかた」（『花団子食家物語』二ウ）。

＊4　「水雞　夜鳴て且に至る水辺にありて晨を告る故に水鶏といふ和三水鶏はなくといはずたゝくといふつねのこと也」（『俳諧歳時記』五月）。

＊5　「蝨　虱は初冬に生じて暮春に尽古人春の句作ありといへともみな春の詞を入れたり虱と斗は冬たるべし○楊州の蘇隠夜臥して数人阿房宮の賦を念ずるを聞声急にして小しこれを視れは虱なりその大サ豆の如し廼これを殺す五雑俎」（『俳諧歳時記』十月）。

＊6　「蝨」（『俳諧歳時記』四月）。

＊7　仙鶴堂鶴屋喜右衛門。

図中に『康熙字典』が見える。『曲亭蔵書目録』には、

康熙字典　華本　六帙四十冊

とあり、馬琴は唐本を所持していたことを知る。なお、この時代、和刻本は都賀庭鐘安永九年校訂本が流布していたと思われる。また「著作堂」は、前年寛政十二年夏に新築成った書斎である。

庚申の夏居を卜して旧燕の栖を得たり房を曲亭と呼ひ堂を著作と号く後園せまうして蕉窓の夜雨を聞にたらずといへとも主客相対して僅かに膝を容るゝの容やすきに似たり（『買飴岳蔦野弄話』十ウ）

『曲亭蔵書目録』書軸に、

著作堂額　東洲書　一張

と見える。

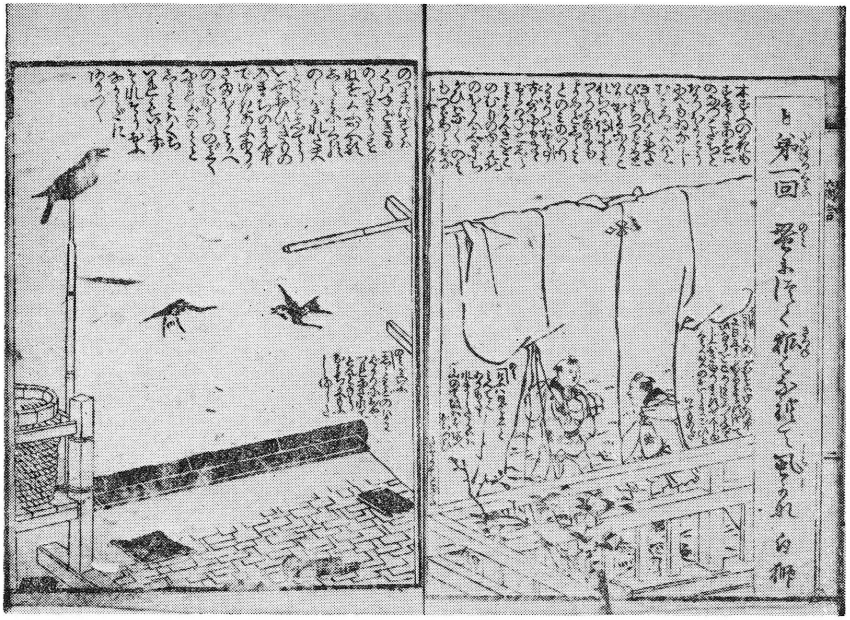
なお、馬琴の像は京伝鼻に画かれているがこれは、『浪速秤華兄芬輪』一ウ・『曲亭一風京伝張』二オでも同様であり、『曲亭一風京伝張』一ウに、次の如くある。

はなのひくいものをみてはけさくしやのよふだといふがげにもゑにかいた京伝と馬琴がかほはとうなすとかぼちやのごとくたゝあぢのあるとあぢのないばかりにてちよつとみてはわからず

（二ウ・三オ）

第一回　蚤（＊1）につく狐はなれて虱かな　白獅

木ずへの花もすでに（＊2）あをばのなつこだち（＊3）となりほうこうにんもゑなじむころがん（＊4）はときわ（＊5）のくにへたびだち（＊6）つばめといり（＊7）かわるなりこれら（＊8）は詩にもつくり哥（＊9）にもよめどしらみとのみのいりかわりは（＊10）古事古哥にもきゝおよばねどしらみもかんきをこのむものゆえ北（＊11）のほ



三オ　　二ウ

うへかへるにちがひはなくのみもつばめとおなじやうにのきのつまにすはくはねどきものゝつまからすねをくふかへるしらみにくるのみはきれた天とくじとして(*12)うをせおひきもののまちのまん中でゆきあふありさまほうこう人のでかわり(*13)のごとくなれどのみとしらみはくちいれもいらずそれそうおふなからだにありつく

「わしはあしがおそいゆへ道中に日かすがかゝりますそして此なりをごろうじろてんどくじ(*14)(ママ)へおさまりますせんじゅくわんおんのおいとまごひといふものだ(*15)

「けふは日がよいとみへてはありもたゝれましたはいは山のて(*16)蚊は本所へおちつひたそうでござる(*17)

「しらみどのはかわばかりにおやつれなされてとんともうおみちかへもふしました(*18)

＊1　「虱にをくれ蚤又うるさし　蚤に付ク狐はなれて虱哉　白獅」(『銭龍賦』銭龍)。

＊2　「残花　青葉の花」(『俳諧歳時記』三月)。「青葉」(『俳諧歳時記』三月)。

＊3　「夏木立」(『俳諧歳時記』四月)。

＊4　「帰雁　今はの鴈」(『俳諧歳時記』二月)。

＊5　「和俗亦謂三燕往二来於常盤国一者皆非」(『和漢三才図会』巻四十二・原禽類・燕)。「又我朝の燕は、越海を渡りて常磐国へ往来するよし待り」(『滑稽雑談』二月)。

*6 「燕　乙鳥の巣○燕は春社に来て秋社に帰る」（『俳諧歳時記』二月）。「燕　鴈にかはりて来物也」（『藻塩草』巻十・鳥類）。

*7 「かりやつばめの入かはりにはおたよりもいたしませう」（『庭荘子珍物茶話』九ウ）。

*8 「燕拖二春社一到二湖湘一」（『円機活法詩学』巻二十三・飛禽門・帰鴈・起句）。「燕来双涎涎雁去累翩翩行楽真吾事尋芳独我先 禹錫」（『白香山詩集補遺』巻下・雑体聯句・会昌春連宴即事）。

*9 「帰雁……燕にかはるよし万葉にみゆ……万葉十九　家持　燕来時爾成奴等鴈之鳴者本郷思都追雲隠喧」（『滑稽雑談』二月）。

*10 「いまも三月ごろのしらみをはなみしらみとなづけのみとしらみのでかはりどきとさだめける」（『花見話虱盛衰記』十五オ）。

*11 「蝨六足行必向レ北」（『和漢三才図会』巻五十二・虫部・卵生類・蝨）。

*12 「紙帳　紙幃也昔ハ三都トモニ売歩行キシコト寛文延宝元禄等ノ俳偕ニ出タリ是亦今京坂ニハ更ニ不レ売レ之江戸ニテハ見世売アルノミ又富民ノ好テ製レ之者アリ白紙ニ墨画等ヲ描カシ所々ヲ地紙形団扇形等ニ窓ノ如ク切除キコレヲ紗ヲ以テハリフサゲリ又困民ハ綿張ト云テ木綿製ノ幃モ用フ者稀ニ有之」（『守貞謾稿』巻十八・雑服）。

*13 「出代　昔は二月三日奴婢の出代リ也今は三月五日九月十日になる」（『俳諧歳時記』二月）。

*14 「おとこしらみはすぎしころはこまくらのうへにてつぶされかみくずかごにうちこまれしよりついにかみくずといやにかいとられけるがいづれもせうだつたるぼぐなればとて（ママ）ゑりわけてんとくしにはりたてければしらみもとも〳〵あたまのうへからせうふをあびせられかみのつぎめにはりこまれいまははひいつることもかなはす」（『花見話虱盛衰記』十一ウ）。

*15 「しらみのゐみやうをせんじゆくはんおんともいへば」（『花見話虱盛衰記』十五ウ）。

*16 「飛蟻　又羽蟻とも」（『俳諧歳時記』四月）。

*17 「蠅」（『俳諧歳時記』四月）。

*18 「蚊」（『俳諧歳時記』四月）。

（三ウ・四オ）

第二回　富士の山蚤(*1)が茶臼の覆(*2)哉　はせを

小男が大がらな女ぼうをもてばのみのふうふのよふだといふたとへにちがひなくのみのていしゆはいたつてちいさく女ぼうははなはだ大きしもつともなりの大きひだけちからもあるとみへてまいあさねどこのうへをみればのみの女ぼうがていしゆをおぶつてとびあるく

三ウ　　四オ

もしにんげんにこふいふすぶてへな女ぼうがあらばたちまちねどころのねだをふみぬくことうたがひなし

「おらがかゝしはなりの大きいだけちからもごうせいだしかし此ずぶてへでしりにしかれちやァおそれるぞ

「はいどう〳〵モシだんなへあとのひとばゞはかけにしやせうヲヤ〳〵そばでもくいにいつたよふだどうせうのふ

＊1　「富士の山蚤か茶臼の覆かな　はせを」（『銭龍賦』蚤）。

＊2　「自在ニ牝牡ニ其大ナル者ハ牝腹ニ有ニ白子ニ成ニ小蚤ニ牡者ハ却小故謂下婦大ニ於夫ニ者ヨリ称ニ蚤之婦夫ニ矣」（『和漢三才図会』巻五十三・虫部・化生類・蚤）。

衝立の詩は、七言絶句である。

駿馬毎駄癡漢走
巧妻常伴拙夫眠
世間多少不平事
不會作天莫作天
右明唐伯虎詩

この詩は、『五雑組』巻之十六・事部四に、左記の如く見える。

晋瘦翌与ニ其兄氷書ニ曰　天公慣慣　無ニ復皁白ニ　近時唐伯虎亦有レ詩云駿馬毎駄ニ癡漢ニ走巧妻常伴ニ拙夫ニ眠世間　多少不平事不レ会レ作レ　天莫レ作レ天雖ニ謔詩ニ亦有レ激　之言也

馬琴が、この詩を『五雑組』によって知ったことは、『曲亭閑記』

五オ　　四ウ

三に、『五雑組』物之部および事之部より主題別に抜き書きを行なっており、この部分もそのまま抜萃、さらに『曲亭閑記』四「狂詩選」に、他の『五雑組』中の詩とともに、「唐伯虎詩」として、この詩を書きつけていること、からわかる。なお、『曲亭蔵書目録』には、

五雑俎翻刻前板　十二冊

とある。

以上から、この絵組みも馬琴の指定によったものであると推定出来る。

（四ウ・五オ）

第三回　よそにさへ願ひ絶めや金の蚤　嵐雪

こゝにのみとりまな五良とていしべきん吉正月のかきもちよりもそつとかたひさむらゐありしんたいはつぷは父母のたまものなればすこしにても身のうちへきづをつけるは大きなるふかうなりといふひぢりのおしへをまもりつねゞ人にかたりけるはぶしたるもののみかにくるしめられからだにきずをつけらるゝことふこうのうへのちぢよくなりさればちうしんぐらの弥五郎がせきひじやうじゆするまではのみにもくわせぬ此からだといひしこそよきものゝふのてほんなりとつねにのみをふせぐことあたをふせぐがごとくかないのものにいひつけのみ一ッ疋とつたるものにはぜに百もんあたへ百疋とれ

ば一分づゝあたへしゆへ今もかね一分を百疋といふとかやある日かまのまへの三介まきべやのすみにてかののみの女ぼうをいけどりたちまちほうびのぜに百にありつきよたか四はいのおごりとでかける(*9)「でかした〳〵とうざのほうびにそれ百はづむはなんとぼうふりをとりにあるくよりはわりがよかろふ」

「ひねられてもつぶされてもじきさまいきかへることをしつていやすしかしむかうの火いれがちときざだわいのう」(*10)

「たわら藤太がむかでをいたるはかりことにならひ人さしゆびへつわをつけてなんのくもなくいけどりました」(*11)

*1 「それにさへ願ひ絶めや金ン の蚤　嵐雪」(『銭龍賦』蚤)。

*2 「蚤擒眼」(『譬喩尽』)。

*3 「石部金吉鉄胄　石部屋吉古左ヱ門トモ云〇石ニ上下キセタトモ云」(『諺苑』)。

*4 「子曰夫孝徳之本也教之所ニ由生ニ復坐吾語レ汝身体髪膚受ニ之父母ニ不ニ敢毀傷ニ孝之始也」(『孝経大義』経一章)。

*5 「此書乃曾子聞ニ於孔子ニ而曾子門人又以下所レ聞ニ於曾子ニ者ヒ合而記レ之以為ニ一経ニ」(『孝経大義』)。

*6 寛延元年初演、浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』。寛政十一年四月中村座、九月森田座、寛政十二年七月市村座にて歌舞伎上演。

*7 千崎弥五郎。

*8 「石キ牌成就する迄は、蚤にもくはさぬ此体」(『仮名手本忠臣蔵』第五)。「せんざき弥五良はいたつてようじやうのよひ男にてせきひじやうじゆするまではのみにもくはせぬ此からだなどゝのみくひかくいまで大そうにいふ」(『加古川本蔵綱目』九ウ)。

*9 「夜鷹……江戸ハ二十四文ヲ定トス」(『守貞謾稿』巻二十二・娼家江戸)。

*10 「蛣蠍」(『俳諧歳時記』四月)。「棒振虫　其年の子は六七歩ゟ一二寸迄の間喰すべし」(『金魚養玩草』餌のこしらへやう)。「雛鳥毛にかゝる節は黒子子いたつて薬なり是は餌の上に置喰す」(『鶯育草』三オ)。「ずいぶんのみとりまなこのちうけんを忍らみ……のみをとりにいだすやはりぼうふりをとりにたすとおなじりかたなり」(『譬諭義理与禅』七ウ)。

*11 「たゝ三すち、もつたるやを、二すちは、いそんじたり、たのむところは、たゝ一すち、これをいそんしては、いかゝせんと、とり〳〵に、おもひめくらしつゝ、このたひの、やしりには、つはきを、はきかけ、うちつかひ……よつひいて、ひやうと、はなちけれは、こんどは、てごたへして、はたとあたる」(『俵藤太物語』上――『室町時代物語大成』第九)。

五ウ

（五ウ）

第四回　きられたる夢はまこと歟蚤の跡　其角

のみのおつとはまな五良がために女ぼうをうしないけることをむねんにおもひ何とぞ此うらみをむくはんとあるときまな五良がひるねをしたるをうかゞひ二のうでよりかたさきかけあばらよりしりこぶたまでしたゝかにくひてからだをかのこのごとくさしければさすがねぼうのまな五良もたちまちにめをさましねござをあげてたづぬれどゆくへはさらにしれざりけり

「のみとりまな五良ともあろふものがこふしりぺたをくわれちやァもふりやうけんがならねへはへアゝこういふうちもかゆくてこたへられねへ

「サアとつてみやれ〳〵こいつはなか〳〵おにわたしよりおもしろだぬきのきんつばやきだわへ

＊1　『銭龍賦』になし。「いきけさにずてんどうとうちはなされたるかさめて後　切れたる夢は誠か蚤の跡」（『五元集』元・三十八ウ――『著作堂俳書目録』に所収）。「きられたる夢はまことか蚤の痕　其角」（『俳諧歳時記栞草』兼三夏物・蚤）。

＊2　「さておひたゝしひのみだからだはかのこもちのやうにしをつた」（『麁相案文当字揃』十四ウ）。「おゝくののみにせ

六オ

められてもゝもせなかもてもあしもかのこまだらにふくれあがり」（『譬諭義理与禦揮』八ウ）。

図中の団扇には、

蚊子刺鐵牛（蚊子鉄牛を刺す）

とある。「刺」は当時、「刺」と通用。

刺（ラク）モトル・タカフ・ウガツ・ソシル・サス（『四声正韻字林大全』）

刺（さす）刃にて物をさす也又刺（さぎ）船（ヲ）にも用ゆ（『都会節用百家通』言語）

（六オ）

中

第五回　景清（かげきよ）（＊1）とあきれし蚤（のみ）のゆく衛（ゑ）哉　才麿

さすがのみとりのまな五良も身うちをはちのすのごとくのみにさゝれかゆさこつずいにてつしあしずりをしてくるしみいたるところへしもべの三介おくれはせにかけきり（＊2）このていをみてともにのみのゆくへをたつねんとむねんがる

「けんじゆつたんれんのそれがしもひるねのゆだんをつけこまれ二のうでからわきばらまですつばりとのみにくわれたうまらねへ

「ヱ、しなしたり〳〵今ひとあしはやくんばかくまでのみにはくわせまいもの何をいふにもそのてゞはかくよりほかはござりませぬ

六ウ　七オ

＊1　「景清とあきれし蚤の行衛哉　才麿」（『銭龍賦』蚤）。
＊2　「かけきたり」の「た」脱カ。

（六ウ・七オ）

第六回　薬盤（＊1）の晩鐘（ばんしゃう）またぬ蚤（のみ）の聲（こゑ）　沾洲

さてものみとりまな五良は名にもにずしたゝかのみにくわれあまつさへかたきののみをとりにがし今はぶしどふたちがたしとてすぐさまかたき打のねがひをいだしければとのにもその心ざしのたわけなるをかんじ給ひしゆびよく御いとまをたまはり御はなむけとしてぬりぼん一まいはいとりもち一トさほにのみとりぐすり百ふくろ下されしゆびのこるところなくごぜんをさかるぞばからしき

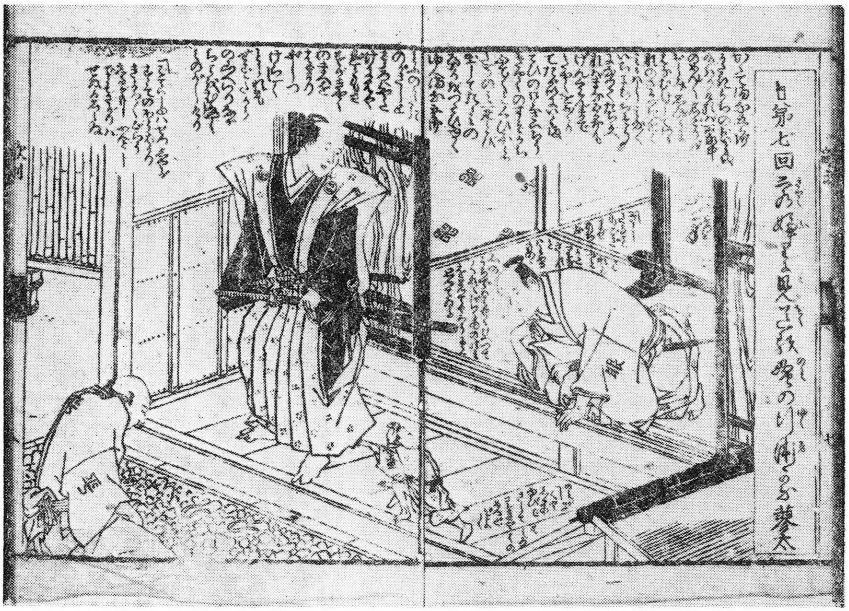
「たとへしりをかのこもちのごとくにくわれよひとよねずにおれば
とてのみとりまなこのくろひうちはおやゆびのつめへちをつけず
にはかへりませぬ

「はやくのみをとりあふせきさんの日をのみまつてをるぞや

「のみのかたきうちのはなむけにはとのにも大きにおこまりなされたがしごくやすあがりてこれのみもとじめのしあわせでござる

「もちははやく水の中へおはなしなされおわたし申スうちだん〳〵おちさうになつてもちあつかいます

＊1　「薬盤の晩鐘またぬ蚤の聲　沾洲」（『銭龍賦』蚤）。



七ウ　　八オ

図中の蚤取薬の袋には、
　　のみの薬
とある。

（七ウ・八オ）

第七回　客ふり(*1)に見送る蚤の行衛かな　蓼太

かくてまな五郎かたきうちのおいとま給はりければ一家中のめん〳〵名ごりをおしみ思ひ〳〵にはなむけしてわかれのさかづきをくみかはしみな〳〵いちにちちそうになつてたちかへればまな五郎もげんくわんまできやくをおくりてたがいにいとまこひの口上さいちうきやくのすそからふて〳〵とくひふとつたるのみ一疋とび出してたゝみのへりをつたひゆくゆへまな五郎とふのかたきのがさしとこゝろはやたけにはやれともさすがきやくのまへをはゞかりぶしつけらしくとられもせず(*2)たからの山へいりながらてをむなしくみのがしけり

「ごていしゆはせつしやがすそのほうばかりきよろ〳〵ごらうしるがもしふんどしでもさがりはせぬかしらぬ

「さしたることもござりませねともちつとおかたりなされとはとめるものゝ心のうちではははやくけへつてくれゝばいゝあののみをとつてやろうにと思つてゐる

「くやしかあゆびでもさしてみろコレきやくのめへだぞよ〳〵

八ウ　　九オ

＊1　『銭龍賦』になし。「客ふりに見送る蚤の行衛哉」(『蓼太句集』上・夏之部・蚤――『曲亭蔵書目録』に所収)。

＊2　「宝の山へ入りながら手を空くして帰るといふ常言は唐山の古語なるにこゝにもいとふるくより雅俗の口実としたるにや三代実録巻之六貞観四年正三位行平中納言伴宿禰善男が奏状に悲三宝山之徒帰一痛刀林之永割一といふ語見えたり後々の物には今昔物語に亦これを載たり」(『燕石雑志』巻之四・一)。「たからの山へ入ながら手をむなしくかへるにあらずや」(『无筆節用似字尽』八ウ九オ)。「たからの山へいりながらてをむなしくかへすか」(『浮世街道御茶漬十二因縁』十オ)。

(八ウ・九オ)

第八回　蚤(*1)に似て押へし虫の哀れなり　百里

まな五良はきやくのかへるをまちかねたゝみを上げゆかをはなしのみのゆくへをたづねけるにようゝだいどころの米びつのまへにてでつくわせてんのあたへととびかゝり忍りかみしつかととつておさへおこしもたてずひねりたをせばもろくもいきはたへにけるなをもいきかへらぬため火入のなかへうちこまんとしがいをひきあげよくゝみればこはむざんやのみ(*2)にはあらてこめ(*3)むしなりまな五良はつとおとろきくすりよみつよとあせれともはやむしのねもかよはねは

今はせんかたなきからをちりとりにこそおくりける

米虫「アヽこれ〳〵おらァのみじやァねへといふにのみこみのわるいてやいだ

「ねぢじやうごじやァねへがおさへたりといつちやァ一寸てもひくものかおのれはねられるならはねてみろふさ〴〵しい

「もし〳〵たんなさんはやくつはきをつけておひねんなさりましかんせんよりしやァあるめへし

＊1　「蚤に似て押へし虫の哀なり　百里」（『銭龍賦』蚤）。

＊2　「猪打とめしと勘平は、鉄鉋提　爰かしこさぐり廻りて扨こそと、引ッ立れば猪にはあらず、ヤァ〳〵こりや人じやなむ三宝仕損じたり」（『仮名手本忠臣蔵』第五）。「かけよつてさぐり見れば、猪にはあらで旅人、なむ三宝過たり、薬はなきかと懐中をさがし見れば」（『仮名手本忠臣蔵』第六）。

＊3　「姑蘩　与奈者米也……俗呼レ米称二菩薩一随呼二此虫一曰二虚空蔵一其形小似レ蚤而赤黒色」（『和漢三才図会』巻五十三・虫部・化生類）。

＊4　「ねち上戸」（『酩酊気質』下）。

（九ウ・十オ）

第九回　投金（＊1）やもろこし船に波と蚤　朝叟

かたきと思ひこんだるよりたちまちくらみしのみとりまな五良はつみなき虫をころしいんとくをそこなひしことこうくわいさらにやむときなくこれといふもこめひつのそうぢをおこたりしあやまちなれはせめて米虫かほたいのためにとて米ひつのそこをはらひ虫になりかゝつたる米をのこらすてのうちに出シあとねんころにとむらゐけるより今もてのうちにたすこめは虫（＊2）になりかゝつたこめからさきへ出してしもふことこのいんゑんかなたかしらす

「こめともむしともしつたならなんのころさふてにかけふする（＊3）ことなすことといすかのはしがみハテあちのないよのひねまいしやなァ（＊4）

「たらいさんせんたくしへおさまりますひめのりのはちまいこんり（＊5）う

「おんかぼちやあとうなすのうさつまいもくふたらはらはりたやうん（＊6）

＊1　「投金やもろこし船に波と蚤　朝叟」（『銭龍賦』蚤）。

＊2　「未レ春米夏月湿熱所二化生一者也」（『和漢三才図会』巻五十三・虫部・化生類・姑蘩）。「つみたくはへし米は、虫を生す……倉におさめて売ことなければ年をこえて、虫となり……穀象といふ虫は米より生ずる虫の名なり」（『浮世物

十オ　　九ウ

語』「二―四)。

＊3　「かほど迄する事なす事、いすかの嘴程違ふといふも」(『仮名手本忠臣蔵』第六)。

＊4　「ハテぜひもなきよのせいすいじやよなァ」(『曲亭一風京伝張』九ウ)。「ハテぜひもないよのありさまじやなァ」(『絵本報讐録』十二ウ)。

＊5　「ねざけさんゑゝかんじどんぶりのこんりう」(『料理茶話即席話』十二ウ)。

＊6　「毘盧遮那仏大灌頂光明真言出三不空羂索経」ヲン。アボギヤ。ベイ(バイ)ロシヤナウ。マカボダラ。マニ。ハンドマ。ジンバラ。ハラバリタヤ。ウム」(『秘密安心往生要集』巻下・三十六)。

図中の旗は、
　田来山千濯寺
と読める。

(十ウ)

第十回　蚤(＊1)ひとつ貞女に帯を解せけり　不知作者

此ときのみはねこのはらの下にかくれゐたりけるをそれともしらすまな五良はのみのゆくへをたつねんとすいふんしつけ(＊2)ふかき所を心

十ウ

あてにいつくともなくたち出けれはのみはるすをつけこみまな五良か女ぼうをよるひるとなくいちりければ日ころてい女のきこへある大のかたそふ女なれとあまりくるしさのまゝ今はせひなくおびひもといてたれぞとねるかと思つたらすぐにぎやうずいをつかひにゆくやつさ

「てい女りやうふ(＊3)にまみへすなとゝかたひ事をいつてもみさつしおれにあつちやァあのとをりだまだどこまでまくらふもしれねへなせおらァこんなにいろおとこだかしらぬ

「とひ上るほとくいおつたにくいのみたのう

＊1　『銭龍賦』になし。「蟻ひとつ貞女に帯を解せけり」(『武玉川』十七篇)。「ふるきつけ合にのみ一ッてい女におびをとかせけりといふ句のあるを思ひ出し」(『譬諭義理与禅褌』七ウ)。

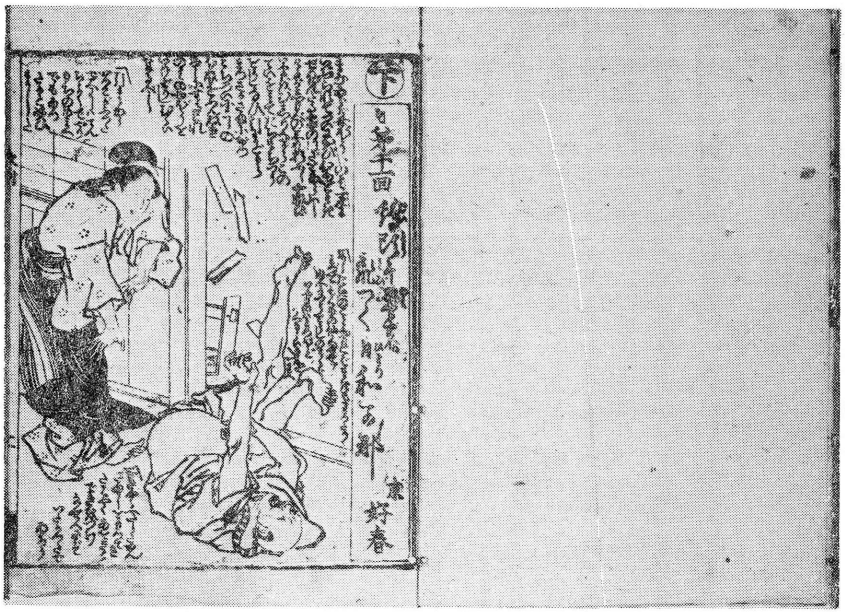
＊2　「夏月人家生ニ於湿熱気一」(『和漢三才図会』巻五十三・虫部・化生類・蝨)。「ずいぶんしつけぶかいところへのみをとりにいだす」(『譬諭義理与禅褌』七ウ)。

＊3　「貞女不レ見三両夫一」(『譬喩尽』)。

(十一オ)

(下)

第十一回　鶏頭(＊1)に蚤の飛つく日和かな　京好春



十一オ

まな五良が女ぼうはのみ一疋にいぢられてついにおびひもをときせんげんたる雪のはだをあらはしけるがしもべの三介折ふしやねの草をむしりながらこのていをみてたちまちつうをうしなひ引まどからまつさかさまにおつこちついにこしのほねをふんぬきめしにするこれのみの女ぼうをいけどりしむくいなるべし

「引まとからやつこがふつたゆへわしはてんぢよくでやりもちのめみへでもあつたかと思ひました

「めしたきのことなればまきもわつたりみづをもくめの仙人じやァ(＊2)ねへかつうをうしのうといふものはよつぽどくるしいもんだわへ

「おきやくへたしたかんざましをもつてきたはやくあをきりできをつけなせへさぞいたかつたであろう

＊1　「餞別　雞頭にも蚤の飛つく日和かな　京好春」(『餞龍賦』雑詠)。

＊2　「久米仙人　物洗ふ女をみて通を失ふ（つれ〳〵）」(『俳諧翌檜』)。「久米仙は、布を浣ふ女子の素脛を見て、堕落せしといふ、こはいとふりたる小説なり」(『玄同放言』巻之三上・人事部二・第三十一)。「おらあはぎのしろきにみとれて廿四文かつうをうしなつたからあさばん水をくめの仙人といふほうこうをするやつさまた」(『胴人形肢体機関』六ウ)。

十一ウ　　十二オ

（十一ウ・十二オ）

第十二回　夏衣（*1）いまだ虱をとり尽さず　はせを

されば晋の豫讓（*2）は身にうるしをさしてかたわとなり越中（*3）の五良兵衛はめにうろこを入れてがんちとやつしともにかたきをねらひしもいままな五良が身にしらくものゆくへさだめぬろう〳〵のたくわへにことかゝねどもわざと非人となつのはらしつけふかきをとりへにてのみのゆくへをさがす身はつゞれもさすがきれぬのこあせとあかとのくさみにやたづぬるのみはたからねどたゞあせじらみにせめられてはらもせなかもばり〳〵とかけばふくれるすかしよのてきずむざんといふもあまりあり〳〵

「しらみ（*4）ひもさか下おびにしきござよつくきゝますイヤしめたらごらうじろ

「むず〳〵〳〵ぞよ〳〵

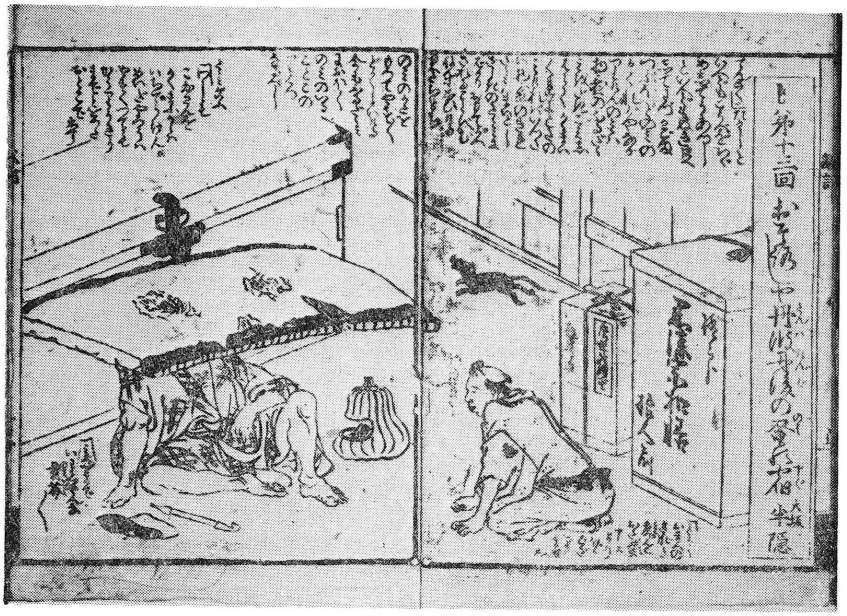
「むず〳〵う

「むず〳〵ぞよ〳〵〳〵

＊1　「夏衣いまた虱をとりつくさす　はせを」（『銭龍賦』『銭龍』）。

＊2　「讓又身に漆をぬり癩病人となり炭を呑で唖となり乞食に皃をかへて無恤をねらふ」（『絵本写宝袋』六之巻）。「予讓　主君の仇をねらひて身をやつしたる人」（『俳諧翌檜』）。

＊3　上総五郎兵衛忠光の誤り。越中次郎兵衛盛嗣との混同であ



十二ウ　十三オ

ろう。「上総ノ五郎兵衛ノ尉忠光……が事は、東鑑、巻第十二、建久三年正月廿一日、前幕府、渡ニ御ス于新造御堂地一条に見えたり。忠光被ニ召捕一、面縛之処、懐中帯ニ一尺余打刀一、魚鱗覆ニ左眼上一などいふ事、その条に見えたれば」(『玄同放言』巻之二・人事部一・第廿六)。

＊4

「これはあをゐ下坂てござります二ツとうにしきうでよつくきれますそれからごろふしませ」(『地獄面照子浄頗梨』五ウ)。「青江下阪ならば二ッ胴にしき腕なれどこれは夫にはことかはりずんど能う錆ましたそれから御らうじろ」(『仮名手本蔵意抄』寺岡平右衛門所佩刀剣)。「あふひ下坂よつくきれますひとたちぬいておめにかけんはみかきはんごんたん此あいだにおもとめなさいなか〳〵さよでござい」(『鼻下長生薬』十二オ)。「あふいしもさかふたつどうにしきがねよつくきれます」(『浮世御道茶漬十二因縁』九ウ)。

(十二ウ・十三オ)

第十三回　おそろしや(＊1)丹波丹後の蚤の宿　大坂半隠

てんとくじたかしといへどもこうべをちゞめしてうあつしといへどもぬき足してわづかごまつぶほどのみのかくれがやなかりけんのみは物置のふるだゝみをだきこみしばらくかくまいくれよとたのみければいつたい物置のきれたゝみはまいとしざしきのたゝみにばかり

十三ウ　十四オ

おもてがへされることをむねんに思ひけるゆへたちまちのみのかたをもつてやす〳〵とかくまいける今もふるだゝみにおほくのみのいることこのりくつなるべし

「わしもこなさんをかくまふからはいちでうけんめいだやろうはやすくつてもからりうきうまでとをつたおとこで爲す

「とかくおまへのきれた床をおた蚤申スよりほかござりませぬ

「みなまでいわしやんな蚤芥〳〵

＊1　「おそろしや丹後丹波の蚤の宿　大坂半隠」（『銭龍賦』蚤）。

図中の箱の字は、

極印
黒漆宗和膳
拾人前

小さい方の箱の字は、

唐草蒔御重

と読める。

（十三ウ・十四オ）

第十四回　古家(＊1)や壁に潜る雨の蚤　江戸羅文(＊2)

てうかさん(＊3)ぶくのあつき(＊4)日にのみのゆくへをたづねあぐみさすがののみとりまな五良も今はせんかたなくしばらくわがやへたちかへり

引こもりいたりしがなつの日のことなれば夕立しのをつくごとくふりきたりいつしか物をきの屋根したゝかもりてふるだゝみ二三でうしぼるばかりにぬれければこれはしよせんやくにたゝぬたゝみなりとて三介にいひつけはきだめへすてさせけるにうんのつきにやかのみはあまもりにぬれしほたれ今はじゆうに身うごきならずよう〳〵たゝみのおもてへはいゐで犬のはらへかくれんとするところをまな五良がせつちんへゆきしかへりにみいだされ何のてもなくいけどらるゝ

「アヽラあやしやといゝはいつたがあとがでねへかんげへているうちのみにげられちやゞつまらねへからいつそせりふなしにむごんのたちまはりでつらまへよふわへ

「むかふへくる人はたしかにのみとりまなことみへるしかしはきだめのそばだからごみとりまなこかもしれぬ

「たゝみこそ今はあだなれこれなくばこんなにぬれもしめへ物をのみをさかさにすればみのになるからすこしはあめがしのがれさうなものだ

＊1　『燕石雑志』巻五下・追加・九・忘かたみ上、および『笠の露』の「東岡舎遺稿四季吟抜萃」に見えず。『曲亭蔵書目録』家書部に見える次掲二書に所収の可能性がある。

仝（＝東岡舎）発句詠草　一巻

仝発句合　一巻

なお、この二書は、「曲亭叢書」中には残されていない。

＊2　「家兄諱は興旨俳諧の連歌を嗜て東岡舎羅文と号し諷咏多かり寛政十年戊午八月十二日病て家に死りき享年四十なり」（『燕石雑志』巻五下・追加・九・忘かたみ上）。『吾仏の記』に詳し。

＊3　「三伏　三旬　夏至の第三の庚を初伏とし四の庚を中伏とし立秋の後初の庚を末伏とす是を三伏といふ　陰陽書」（『俳諧歳時記』六月）。

＊4　「暑き日」（『俳諧歳時記』六月）。

＊5　「夕立　誹諧に白雨の文字を用てゆふだちと訓こと近頃森由己法橋といふ連哥師山谷が詩に（東坡にもあり）出たりとて始めて書り　御傘」（『俳諧歳時記』六月）。

＊6　「ずいぶんのみとりまなこのちうけんをゑらみ……のみをとりにいだす」（『譬諭義理与襍禪』七ウ）。

＊7　「題しらず　よみ人しらず　かたみこそ今はあたなれこれなくはわするる時もあらましものを」（『古今集』巻十四・恋四・七四六）。

（十四ウ・十五オ）

第十五回（＊2）　蚤（＊1）飛ぶや指にはたらく御曹子　三州　白雪
塗桶にはまるや蚤の運の末　大津　尚白

のみとりまな五良はこけのいつしんにてよう〳〵とめざすかたきの

十四ウ　　十五オ

のみ一疋をふるだゝみのおもてにてつらまへければこのうへはさほうのごとくかたきうちあるべしとて十けん四ほうにやらいをゆひまはしやらいのそとにはのみのはいでる所もなくけんぶつのくんじゆをたゝせとのよりもけんしの役をたてられければまな五良はずいぶんと身かるに出たちきみより給わつたるはいとりもちとぬりぼんをさゆふにたばさみやらひのまんなかへあゆみ出かのもちをひねくりまわしのみをさゝんとつゝかくればのみはさゝれまじとかいくゞりひてうのごとくとびまはりまな五良がやせずねへしがみつかんとくるところをゑたりやおふとひつばつしのみとりぐすりのめつぶしにてぬりぼんの中へうちおとしおやゆびのつめをもつてはつしとつぶすおとたかくやらひのそとまでこへをあげ扨もとつたりつぶしたりとかんずるものはなかりけり

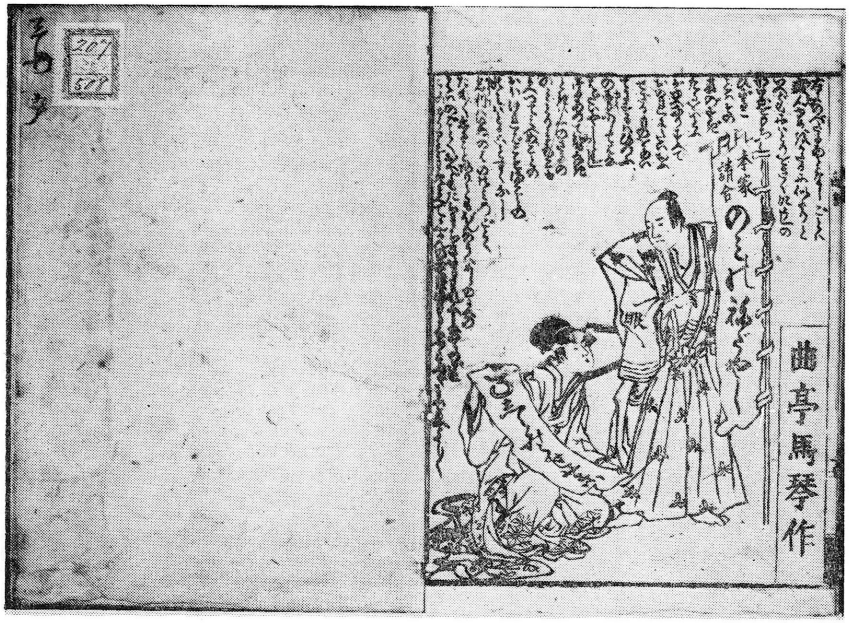
「三介も主人のせんどをみとゞけんとやろうのたゝみざんをするようなゆびつきをしてのみのとぶをねらつている

「こふぼんのきよくがじやうずになつちやァばかばやしのしほふきにもでられそうなものだ

＊1　「蚤とぶや指にはたらく御曹司　三河 白雪」（『銭龍賦』蚤）。

＊2　「塗桶にはまるや蚤の運の末　大津 尚白」（『銭龍賦』蚤）。

＊3　「主人へねかいて御じやう下へ三十けん四めんに竹やらいをゆい」（『復讎後祭祀』十四ウ）。「二丁四ほうにやらひをしつらいすでにかたき打のじこくにいたり」（『絵本報讐録』十五ウ）。



十五ウ

（十五ウ）

右にのべたるあとなしごとは癡人ゆめをかたるに似たりといへども（＊1）にはとりをさくにうしのかたなをもちひざることはその用のすぎたるをいとふがゆへなりすべておのれにたいおふせざるものをあいてにするはひつふの勇にしてはなはだいやしもし勇あつて智なきときは心のさるのみとりまなこもかへつてみへぬことのおほければこそまことののみはとることすくなし名利（＊2）はいぬのはののみのごとくたま〳〵ゑることありともぼんのうはめしのうへのはいのごとくおへどもたちまちきたるわれ人みなかくのごとしこゝのどうをわきまへてかんにんの二字をまもる人しゝそん〴〵までめでたし〳〵

曲亭馬琴作

＊1　「雞を裂に、牛刀を、用ひ給ふはいかにぞや」（『椿説弓張月』拾遺・巻之二・第四十九回）。「こはかる〳〵しき御挙動かな。鶏を割に、牛刀をもちふべからず」（『椿説弓張月』残編・巻之四・第六十五回）。

＊2　「こゝろのさるまなこ　ものまへの　のみとりまなこ」（『浮世街道御茶漬十二因縁』十二ウ）。「こゝろの猿　高僧伝云知彼所二依処一　从中心猿猴起上　云云。黄山谷詩　心猿方睡起。是」（『曲亭題跋』上）。

＊3　「飯の上の蠅追ふやうなもの」（『譬喩尽』）。

図には、

本家請合のみのねだやし
しらみうせ薬

とある。「しらみうせ薬」は、幸手屋茂兵衛と鍋屋源兵衛の両店から売り出されているが、『花見話虱盛衰記』六ウに、同種の図が見え、

これよりさつてやのしらみひむをしめ

とあるので、ここも幸手屋のほうを指すものであろう。

そも〳〵このゑんのつなのかたちを申さばしらみひもののかんばんのごとし（『大雑書抜萃縁組』二オ）

ふんどしにはさんであるはこつぶではないかさつてやのしらみひもとはみへぬ〳〵（『世諺口紺屋雛形』十三ウ）

〔付記〕

本稿は、昭和57年度、国語国文学演習Ⅰの授業において行なった演習発表をもととし、各自が担当部分の原稿を整理したものを、さらに岩田が全面的に補訂改稿したものである。

馬琴の黄表紙の翻刻については、

清田啓子氏「翻刻曲亭馬琴の黄表紙(1)～(8)」（『駒沢短期大学研究紀要』3～12――昭50・3～昭59・3）

板坂則子氏「翻刻解題曲亭馬琴の黄表紙――享和元年――(1)～(5)」（『群馬大学教育学部紀要　人文・社会科学編』31～35――昭57・3～昭61・3）

がある。両氏の御発表予定のところを本作品だけ特に御許しをいただきこうした形で発表させていただいた。なお板坂氏が前掲(5)において、『敵討蚤取眼』は他に注釈を付す計画があることを記されているが、それは本稿をさすものであり、両氏の暖い御配慮に対して深甚の謝意を表すものである。また演習当時のものをそのまま発表したため形式の統一が行なえなかったことをお詫びしておきたい。

なおまた、本稿をなすに当って、馬琴の蔵書目録については服部仁氏の、上巻絵題簽および早大本『敵討蚤取眼』また大惣本『教訓蹟の祭』については棚橋正博氏の、「曲亭叢書」については柴田光彦氏の、それぞれ御教示を得た。特に、板坂則子氏からは種々の御配慮をたまわった。併せて深謝申し上げたい。

さらに、本文の復刻・翻刻に関しては国立国会図書館より、また上巻絵題簽の掲載に関しては早稲田大学図書館より、中・下巻絵題簽の掲載に関しては東京都立中央図書館より、それぞれ御許可をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

（この項、文責岩田）